

女客

泉鏡花作

—

「謹さん、お手紙、」

と階子段から聲を掛けて、二階の六疊へ上り切らず、欄干に白やかな手をかけて、顔を斜に覗きながら、背後向きに机に寄つた當家の主人に、一枚を齎らした。

「憚り、」

と身を横に、蔽うた燈を離れたので、玉ほやを透かした薄あかりに、くつきり描き出された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳見るやう、髪も容もすつきりした中年増。

これはあるじの國許から、五ツになる男の兒を伴うて、此度、上京、しばらく爰に逗留して居る、お民といつて縁續き、一時繪師の女房である。

階下で添乳をして居たらしい、色はくすんだが艶のある、藍と紺、縦縞の南部の袷、黒繻子の襟のな

り、ふつくりした乳房の線、幅細く寛いで、晝夜帯の暗いのに、緩く纏うた、縮緬の扱帯に蒼味のかゝつたは、月の影のさしたやう。

燈火に對して、瞳清しう、鼻筋がすつと通り、口許の緊つた、瘦せぎすな、眉のきりゝとした風采に、しどけない態度も目に立たず、繕はぬのが美しい。

「これは憚り、お使ひ恐入ります。」

と主人は此方に手を伸ばすと、見得もなく、婦人は胸を、はらんばひに成るまでに、づつと出して差置くのを、疊をずらして受取つて、火鉢の上で一寸見たが、端書の用は直ぐに濟んだ。

机の上へ差置いて、

「眞個に御苦勞様でした。」

「はい、これはまあ、御丁寧な、御挨拶痛み入りますこと。お勝手から此方まで、随分遠方でございますからねえ。」

「憚り様ね。」

「些とも憚り様なことはありません。謹さん、」

「何ね、」

「貴下、其の（憚り様ね）を、端書を読む、つなぎに言つてるのね、ほゝゝゝ。」

「謹さんも莞爾して、」

「お話しなさい。」

「難有う。」

「さあ、此方へ。」

「はい、誠に何うも難有う存じます、いゝえ、何うぞもう、何うぞ、もう。」

「早速だ、おや／＼。」

「大分丁寧でございませう。」

「そんな皮肉を言はないで、坊やは？」

「寝ました。」

「母は？」

「行火で、」と云つて、腕を曲げた、雪なす二の腕、擔いだやうに寝て見せる。

「貴女にあまえて居るんでせう。どうして、元氣な人ですからね、今時行火をしたり、宵の内から轉寝をするやうな人ぢやないの。鐵は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汁の實を仕入れるのです。それから私がお道樂、翌日は田舎料理を達引かうと思つて、次手に其の分も。」

「ぢや階下は寂しいや、お話しなさい。」

お民は其まゝ、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引っかけの端をぎうと撫で、軽く衣紋を合はせながら、後姿の襟清く、振返つて入つたあと、欄干の前なる障子を閉めた。

「此處が開いて居ちや寒いでせう。」

「何だかぞく／＼するやうね、悪い陽氣だ。」
と火鉢を前へ。

「開ツ放して置くからさ。」

「でもお民さん、貴女が居るのに、其處を閉めて

置くのは氣になります。」

時に燈に近う來た。瞼に颯と薄紅。

坐ると炭取を引寄せて、火箸を取つて俯向いたが、
「お禮に繼いで上げませうね。」

「どうぞ、願ひます。」

「まあ、人様のものので、義理をするんだよ、こんな呑氣ツちやありやしない。串戯はよして、謹さん、東京は炭が高いんですつてね。」

主人は大胡坐で、落着濟まし、

「吝なことをお言ひなさんな、お民さん、阿母は行火だと言ふのに、押入には葛籠へ入つて、未だ蚊帳があるといふ騒ぎだ。」

「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか。又いつかのやうに、夏中蚊帳が無くつては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか没落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。」

何しろ、家の焼けた年でせう。あの焼あと、云ふものは、何ういふわけだか、恐しく蚊が酷い。未だ

其の騒ぎの無い内、當地で、本郷のね、春木町の裏
長屋を借りて、夥間と自炊をしたことがありました
つげが、其の時も前の年火事があつたと云つて、何
年にもない、大變な蚊でしたよ。けれども、それは
何、少いもの同志だから、萌黄絨の鎧はなくても、
夜一夜、戸外を歩行いて居たつて、それで事は済み
ました。

内ぢや、年よりを抱へて居ませう。夜が明けても、
的はないのに、夜中一時二時まで、友達の許へ、
苦い時の相談の手紙なんか書きながら、わきで寝返
りをなさるから、阿母さん、蚊が居ますかつて聞
んです。

自分の手にや五ツ六ツたかつて居るのに。」

主人は火鉢にかざしながら、

「居ますかもないもんだ。」

あゝ、些と居るやうだの、と何でもないやうに、
言はれるんだけれども、何故阿母には居るだらうと、
口惜いくらゐでね。今に工面して遣るから可い、蚊
の畜生覺えて居ると、無念骨髓でしたよ。未だそれ
よりか、毒蟲のぶん／＼矢を射るやうな烈い中に、

疲れて、すや／＼、
傍に私の居るのが嬉し
しさうに、快よさうに眠られる時は、猶堪らなく
つて泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐しさうな言であつた。

「まさか、蚊に喰殺されたといふ話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧でしたな。」

「然うだつてねえ。今ぢや笑ひばなしになつたけれど。」

「餘り然うでもありません。しかしまあ、お庇様、どうか蚊帳もありますから。」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹さん、貴下。」「と優しい顔。」

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました。伯母さんは又自分の身がかせになつて、貴下が肩が抜けないし、然うか

といつて、修業中で、どう工面の成らうわけはないのに、一ツ賣り二ツ賣り、一日だてに、段々煙は細くなるし、最う二人が消えるばかりだから、世間體さへ構はないなら、身體一ツないものにして、貴下を自由にしてあげたい、と初中然う思つていらしたつてね。お互に今聞いても、身ぶるひが出るぢやありませんか。」

と顔を上げて目を合はせる、兩人の手は左右から、思はず火鉢を壓へたのである。

「私は又私で、何です、なまじ薄髯の生えた意氣地のない兄哥がついて居るから起つて、相應に何うにか遣繰つて行かれるだらう、と思ふから、食物の足りぬ阿母を、世間でも黙つて見て居る。一層悴がないものと極つたら、たよる處も何にもない、六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだらう。やつ了はうかと、日に幾度考へたかね。

民さんも知つて居ませう、あの年は、城の濠で、大層投身者がありました。」

同一年の、あひやけは、姉さんのやうな頷き方。

「あゝ。」

「確か六七人もあつたでせう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤を弾くやうに、指を反らして、

「謹さん、もつとですよ。八月十日の新聞までに、八人だつたわ。」

と仰いで目を細うして言つた。幼い時から、記憶の鋭い婦人である。

「ぢや、九人になる處だつた。貴女の内へ遊びに行くと、何時も歸りが遅くなつて、日が暮れちや、あの濠端を通つたんですがね、石垣が蒼く光つて、眞黒な水の上から、むら／＼と白い煙が、此方に這ひかゝつて来るやうに見えるぢやありませんか。」

引込まれては大變だと、早足に歩行き出すと、何だかうしろから追ひ駈けるやうだから一心に遁げ出してさ、坂の上で振り返ると、凄いやうな月で。

あゝ、春の末でした。

あとについて来たものは、自分の影法師ばかりな
んです。

自分の影を、死神と間違へるんだもの、御覽なさい、生きて居る瀬はなかつたんですよ。」

「心細いぢやありませんか、ねえ。」

と寂しさうに打傾く、面に映つて、頸をかけ、黒
縷子の襟に障子の影、薄ら蒼く見えるまで、戸外は
月の冴えたる氣勢。カラ／＼と小刻に、女の通る下
駄の音。屋敷町に響いたが、女中は未だ歸つて來な
い。

「心細いのが通り越して、氣が變になつて居たんです。

ぢや、そんな、氣味の悪い、物凄、死神のさそ
ふやうな、厭な濠端を、何の、お民さん。通らずと
もの事だけれど、何故か又、故にも、其處を歩行
いて、行過ぎて了つてから、未だ死なゝいで居るつ
て事を、自分で確めて見たくてならんのでしたよ。

危険千萬。

だつて、今だから話すんだけれど、其の蚊帳なし

で、蚊が居るツていふ始末でせう。無いものは活計の代といふ譯で。

内で熟として居たんぢや、たとひ曳くにしろ、車も曳けない理屈ですから、何がなし、戸外へ出て、足駄穿きで駈け歩行くしだらだけれど、さて出ようとすると、氣になるから、上り框へ腰をかけて、片足履物をぶら下げながら、母さん、お米は？ ツて聞くんです。」

「お米は？ ツてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのである。あるじは敢て莞爾やかに、

「恐しいもんだ、其の癖兩に何升どこは、此の節却つて覺えました。其頃は、眞個です、無い事は無いにしろ、幾許するか知らなかつた。」

皆、親のお庇だね。

其の阿母が、然うやつて、お米？ はツて尋ねると、晩まであるよ、とお言ひなさる。

翌日のが無いと言はれるより、どんなに辛かつたか知れませんか。お民さん。」

と呼びかけて、固より答を待つにあらす。

「もう、其の度にね、私はね、腰かけた足も、足駄の上で、何だつて、恚う脊が高いだらう、と土間へ、へた／＼と坐りたかつた。」

「まあ、貴下、大抵ぢやなかつたのねえ。」

フト其の時、火鉢のふちで指が觸れた。右の腕はつけ許まで、二人は、はつと熱かつたが、思はず言ひ合はせたかの如く、鐵瓶に當つて見た。左の手は、ひやりとした。

「謹さん、沸しませうかね。」
と軽くいふ。

「すつかり忘れて居た、お庇さまで火もよく起つたのに。」

「お湯があるか知ら。」
と引つ立て、蓋を取つて、燈の方に傾けながら、
「貴下。一寸、其の水差を。お道具は揃つたけれど、何だか此の二階の工合が下宿のやうぢやありませんか。」

四

「それでもね、」

とあるじは若々しいものいひで、

「お民さんが来てから、何となく勝手が違つて、一寸餘處から歸つて來ても、何だか自分の内のやうぢやないんですよ。」

「あら、」

とて清しい目をニり、鐵瓶の下に兩手を揃へて、眞直に當りながら、

「そんな事を言ふもんぢやありません。外へといつては、それこそ田舎の芝居一つ、めつたに見に出た事もないのに、はる／＼一人旅で逢ひに來たんぢやありませんか、酷いよ、謹さんは。」

と美しく打怨ずる。

「飛んだ事を、はゝゝ。」

とあるじも火に翳して、

「そんな氣でいつた、内らしくないではない、其の下宿屋らしくないと言つたんですよ。」

「ですからね、早くおもらひなさいまし、悪いこ

とはいひません。どんなに氣がついても、しんせつでも、女中ぢや推切つて、何かすることが出来ませんからね、どうしても手が届かないがちになるんです。伯母さんも、もう今ぢや、蚊帳よりお嫁が欲しいんですよ。」

あるじは、屹と頭を掉つた。

「否、よします。」

「何為ですね、謹さん。」と見上げた目に、敢て疑の色はなく、別に心あつて映つたのであつた。

「何故といふと議論になります、唯ね、私は欲くないんです。」

恚ういへば、理屈もつけよう、又どう恚うといふけれどね、年よりのためにも他人の交らない方が氣樂で可いかも知れません。お民さん、貴女が恚うやつて遊びに来て呉れたつて、知らない婦人が居ようより、阿母と私ばかりの方が、御馳走は届かないにした處で、水入らずで、氣が置けなくつて可いぢやありませんか。」

「だつて、謹さん、私が恚うして居いゝために、一生貴方、奥さんを持たないで居られますか。それも、五年と十年と、此のまゝで居たいたつて、此方に居られます身ぢやなし、最う二週間の上になつたつて、五日目ぐらゐから、やい／＼歸れつて、言つて来て、三度めに來た手紙なんぞの様子ぢや、良人の方の親類が、あゝの、恚うのつて、面倒だから、それにつけても早々歸れぢやありませんか。また貴下を置いて、他に私の身についた縁者といつてはないんですからね。どうせ歸れば近所近邊、一門一類が寄つて集つて、」

と婀娜に唇の端を上げると、顰めた眉を掠めて落ちた、鬢の毛を、焦つたさうに、背へ投げて搔上げつゝ、

「此の髪を筆りたくなるやうな思ひをさせられるに極つてるけれど、東京へ來たら、生意氣らしい、氣が大きくなつた上、二寸切られるつもりになつて、度胸を極めて、伯母さんには内證ですがね、これでも自分で呆れるほど、料簡が据つて居ますけれど、

だつて然うは御厄介になつても居られませんか。」「

「何時までも居て下さいよ。最う、私は、女房な
んぞ持たうより、貴女に遊んで居て貰ふ方が、どん
なに可いか知れやしない。」「
と我儘らしく熱心に言つた。

お民は言を途切らしつ。鐵瓶はやゝ音に出づる。

「謹さん、」

「えゝ、」

お民は唾をのみ、

「眞個ですか。」「

「眞個ですとも、眞個ですよ。」「

「眞個に、謹さん。」「

「お民さんは、嘘だと思つて。」「

「ぢやもう一層。」「

と烈しく火箸を灰について、

「歸らないで置きませうか。」「

五

我^{われ}を忘^{わす}れてお民^{たみ}は一氣^{いっき}に、思^{おも}ひ切^きつていひかけた、
言^{こと}の下^{した}に、あはれ水^{みづ}ならぬ灰^{はひ}にさへ、かず書^かくより
も果^は敢^かげに、悄^{しよんぼり}乎^{かた}肩^{かた}を落^おしたが、急^{きふ}に寂^{さび}しい笑^{えがほ}顔を
上^あげた。

「ほゝゝほゝ、其^その氣^きで澤^{たく}山^{さん}御^ご馳^ち走^{そう}をして下^{くだ}さい
まし。お茶^{ちや}ばかりぢや私^{わたし}は厭^{いや}。」
といふうち涙^{なみだ}さしくみぬ。

「謹^{きん}さん、」
といふも曇^{くも}り聲^{こゑ}に、

「も、貴^{あなた}下^た、どうして、そんなに、優^{やさ}しくいつて
下^{くだ}さるんですよ。恚^{いか}うした私^{わたし}ぢやありませんか。」

「貴^{あなた}女^なでなくツて、お民^{たみ}さん、貴^{あなた}女^なは大^{だい}恩^{おん}人^{じん}なん
だもの。」

「えゝ？恩^{おん}人^{じん}ですツて、私^{わたし}が。」

「貴^{あなた}女^なが、」

「まあ！誰^ど方^{なた}のねえ？」

「私^{わたし}のですとも。」

「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで兒持になつたんですもの。碌に小袖一つ仕立つて上げた事はなく、貴下が一生の大切だつた、其のお米のなかつた時も、煙草も買つてあげないでさ。」

後で聞いて口惜くつて、今でも怨んで居るけれど、内證の苦しい事つたら、些とも伯母さんは聞かして下さらないし、あなたの御容子でも分りさうなものだつたのに、私が氣がつかないからでせうけれど、何時お目にかゝつても、元氣よく、いき／＼してねえ、眞個ですよ、今なんぞより、竄れてないで、もつと顔色も可かつたもの

「それです、それですよ、お民さん。其の顔色の可かつたのも、元氣よく活々して居たのだつて、貴女、貴女の傍に居る時の他に、然うした事を見た事はありますまい。」

私は、最う、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢へば、元氣が出て、心が活々したんです。それだから貴女はつひぞ、ふさいだ、陰氣な、私の屈託顔を見た事はないんです。

ねえ。

先刻もいふ通り、私の死んで了つた方が阿母のため
に都合よく、人が世話をしようと思つたほどで、
又それに違ひはなかつたんですもの。

實際私は、貴女のために生きて居たんだ。

而して、お民さん。」

あるじが落着いて靜にいふのを、お民は激しく聞
くのであらう、潔白なる其の顔に、湧上る如き血汐
の色。

「切迫詰つて、いざ、と首の座に押直る時には、
たとひ場處が離れて居ても、屹と貴女の姿が来て、
私を助けて呉れるツて事を、堅くね、心の底に、確
に信仰して居たんだね。」

まあ、お民さん許で夜更しゝて、ぢや、おやすみ
つてお宅を出る。遅い時は寢衣のなりで、寒いのも
厭はないで、貴女が自分で送つて下さる。

門を出ると、あの曲角あたりまで、貴女、其の寢
衣のまゝで、暗の中まで見送つて呉れたでせう。小

兒が奥で泣いてる時でも、雨が降つて居る時でも、
づつと背中まで外へ出して。

私は又、曲り角で、屹と、竊と立停まつて、しばらく経つて、カタリと樞のおりるのを聞いたんです。其の、歸り途に、濠端を通るんです。樞は下りて、貴女の寝た事は知りながら、今にも濠へ、飛込まうとして、此の片足が崖をはづれる、背後を確乎と引留めて、何をするの、謹さん、と貴女が屹といふと確に思つた。

ですから、死なうと思ひ、助かりたい、と考へながら、そんな、厭な、恐ろしい濠端を通つたのも、樞をおろして寝なすつた、貴女が必ず助けて呉れると、それを力にしたんです。お庇で生きて居たんですもの、恩人でなくツてさ、貴女は命の親なんですよ。

と唯懐しげに嬉しさうにいふ顔を、熟と見る／＼、ものをもいはず、お民ははら／＼と、薄曇る燈の前に落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり齒を力チリと、堰きあへぬ涙を噛み留めつゝ、

「口についていふやうでをかしいんですが、私も矢張。貴下は、もう、今ぢやこんなにおなりですか、私は要らなくなつたでせうが、私は今も、今だつて、其の時分から、何ですよ、同じなんです、謹さん。慾にも、我慢にも、厭で／＼、厭で／＼死にたくなる時がありますとね、然うすると、貴下が来て、お留めなさると思つてね、それを便りにして居ますよ。」

まあ、同じやうで不思議だから、これから別れて歸りましたら、私も又、月夜にお濠端を歩行きませう。而して貴下、謹さんのお姿が、其處へ出るのを見ませうよ。」

と差俯向いた肩が震へた。

あるじは、思はず、火鉢なりに擦り寄つて、

「飛んだ事を、串戯ぢやありません、そ、そ、そんな事をいつて、議（小兒の名）さんを何うしま

す。
」

「だつて、だつて、貴下が、其の年、其の思ひをして居るのに、私のはあの兒を拵へました。そんな、そんな兒を構ふものか。」

とすねたやうに鋭くいつたが、露を湛へた花片を、湯氣やなぶると、笑を湛へ、

「ようござんすよ。私はお濠を樂みにしますから。でも、こんなぢや、私の影ぢや、凄しい死神なら可いけれど、大方融にでも見えるでせう。」
と投げたやうに、片身を疊に、褻も亂れて崩折れた。

あるじは、ひたと寄せて、押へるやうに、棄てた女の手を取つて、

「お民さん。」

「國へ、國へ歸しやしないから。」

「あれ、お待ちな古い伯母さんが。」

「どうした、どうしたよ。」

といふ母の聲、下に聞えて、わつとばかり、其の

譲といふ兒が。

「煩いねえ！一寸、見て来ますからね、謹さん。」

とはらりと立つて、脛白き、敷居際の立姿。やがてトン／＼と階下へ下りたが、泣き留まぬ譲を横抱きに、しばらくして品のいゝ、母親の優しい形で座に返つた。燈火の陰に胸の色、雪の如く清らかに、譲はちゆう／＼と乳を吸つて、片手で絶つて泣きじやくる。

あるじは、きちんと坐り直つて、

「どうしたの、酷く怯えたやうだつけ。」

「夢を見たかい、坊や、どうしたのだねえ。」

と頬に顔をかさぬれば、乳を含みつゝ、愛らしい、大きな目をくる／＼とやつて、

「黽が、阿母さん。」

「えゝ、」

二人は顔を見合はせた。

あるじは、居寄つて顔を覗き、故らに打笑ひ、

「何、内へ鼯なんぞ出るものか。坊や、鼠の音を聞いたんだらう。」

小兒はなほ含んだまゝ、いたいけに捻向いて、

「うゝむ、内ぢやないの。お濠ン許で、長い尻尾で、あの、目が光つて、私、私を睨んで、恐かつたの。」

と、くるりと向いて、ぴつたり母親の其の柔かな胸に額を埋めた。

又顔を見合はせたが、今は其の色も變らなかつた。

「おゝ、然うかい、夢なんですよ。」

「恐かつたな、恐かつたな、坊や。」

「恐かつたね。」

から／＼と格子が開いて、

「どうも、おそなはりました。」と勝手にいつ

て、女中が歸る。

「さあ、御馳走だよ。」

と衝と立つたが、早急だつたのと、抱いた重量で、裳を前に、よろ／＼と、お民は、よろけながら段階子。

「謹さん。」

「翌朝のお米は！」

と艶麗に莞爾して、

「早く、奥さんを持つて下さいよ。あゝ、女中さ

ん御苦勞でした。」

と下を向いて高く言つた。

其時襖の開く音がして、

「おそなはりました、御新造様。」

お民は答へず、ほと吐息。圓鬚艶やかに二三段、

片頬を見せて、差覗いて、

「此處は閉めないで行きますよ。」

【完】